高知県立坂本龍馬記念館だより　2013(平成25)年1月　第84号

高知県立坂本龍馬記念館　The Sakamoto Ryoma Memorial Museum

飛陽（ひよう）

海援隊旗（二曳きの旗）

http://www.ryoma-kinenkan.jp

広大 KHODAI MUHEN 無辺

「5分前までは見知らぬ他人同士が、手をつないだその瞬間、確かに友達になった。同時にぐっと胸にこみ上げてくるものを感じた」。桂浜の龍馬像と館前のシェイクハンド龍馬像を900人の握手で結んだ「レッツゴー・ハンド・イン・ハンド」に参加した地元のおばさん。11月の龍馬まつりイベントの感想である。おばさんは左手を園児、右手は神戸から来たという若者。そして来年も手をつなぐ約束をした。

つなぐぜよ！

“手をつなぐ”は龍馬記念館の今年のテーマに決めた。いや、永遠のテーマだ。

〝龍馬スピリッツ〟発信！

揺れる世相に、職員一丸となって

「謹賀新年！」　年末総選挙に象徴される混乱を引きずったまま新年が明けた。2013年、まさに波乱の年の予感である。社会の不安感は確実に深まっている。どこか定かではない一点に向かって、国全体がなだれ込んでいくような危機感さえうかがえる。政治、経済、社会、国民生活を支える基本の柱が揺らいでいるのだ。

連日のようにマスコミをにぎわす事件報道を見れば、誰もがいつどんな渦中に巻き込まれても不思議でないのが現実である。まさに〝幕末〟ではないか。吹く風に〝幕末の殺気〟さえ伝わる。こうした世相の断面は龍馬記念館に残される入館者の皆さんの声にもはっきりと現われている。

いまや平成の龍馬登場を望む声は悲鳴に近い。

それだけに、龍馬記念館の果さねばならぬ役割の重さを実感する。「龍馬の顕彰」「龍馬思想の普及」その使命は変わらないが、どうそれを混乱の現代に発信して反映させていくか。年間4本の企画展の充実はもちろんだが、外に対して〝龍馬スピリッツ〟の効果的発信がともなわなければならない。対象は特に子供達。つまり学校へのアプローチの大切さを思う。それは龍馬記念館だけでの取り組みではどうにもならない。学校、地域が一体となってこそより効果が現われる。

また、龍馬記念館が完全な博物館機能を備えることも重要である。スタッフを、史料類を安全、確実に守る〝基地〟があってこそ、発揮できる実力だからだ。ソフト、ハード両面の体制固めが今、必要だろう。今年、館は職員一丸となって〝龍馬スピリッツ〟発信に全力を挙げる。よろしくお願いいたします。

森　健志郎

2013年がスタート。テーマは「手をつないで前進しよう！」

2013年最初の企画展は「龍馬の言伝 ―手紙の楽しみ方―」展（1月12日～5月17日）。〝筆まめ〟と言われた龍馬の手紙をただ単に読むのではなく細かく分析。手紙に隠された龍馬の意外な一面に迫る。　5月18日～7月19日は「漂巽紀略」展。7月20日～10月25日は「土佐の武術」展。10月26日～翌年1月24日は「古き良き江戸時代」展と続く。

11月18日のイベント開催にあたり、当館では職員全員で何度もミーティングを重ねた。これまでのように決定したことを報告し指示通りに動くのではなく、職員一人一人がイベントを成功させるためのアイデアを出し合った上で、各自が考えて行動するという体勢ができた。その意味でも当館としては大変意義のある、まさに〝手をつないで前進した〟イベントとなった。この勢いで2013年も様々なことに取り組んでいきたい。

尾﨑　由紀

筆まめ龍馬

『龍馬の言伝―手紙の楽しみ方―』展

手紙から読み取れる細かい配慮・豊かな発想力

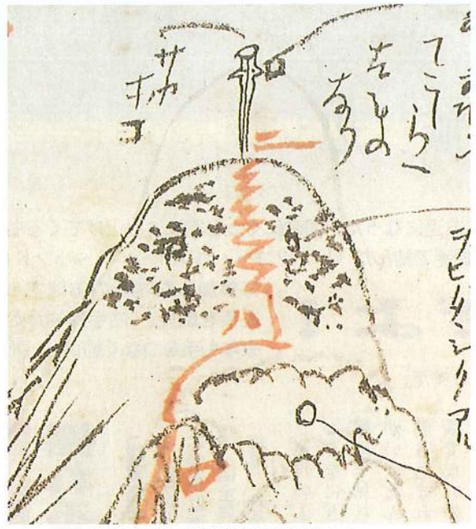
会期：平成25年1月12日（土）～5月17日（金）

手紙には書いた人の人柄が表れる。龍馬は、自由奔放に書いた手紙がいくつかあるため、豪快で小さな事に拘らないようなイメージを持たれる。しかし、多くの手紙を分析すると、意外にもかなり細かい配慮をする人物だということが分かる。受け取る相手のことを考えながら、失礼の無いように手紙文の形式に則って書いたり、自分の身を心配してくれている相手であれば、過度の心配をしなくても良いように明るい調子で書いたり、女性宛ては漢字を少なくして平仮名を多くするような配慮もする。また、独特の例え話が好きで、発想力の豊かさを感じさせるものもある。さらに、本文より追伸が長いものがあったり、紙の余白を残さない書き方をしたり、多くの特徴を読み取ることができる。

ここでは、有名な高千穂峰登山の手紙（通称：新婚旅行の手紙）を例にしたい。この手紙は乙女宛てで、慶応2年12月4日に書かれている。この日は、兄権平宛てに一通、家族親戚皆に見てもらうものも一通書いているので、合計3通書いたことになる。合計の長さはおそらく8mを越えるだろう。この日は父八平の命日なので、父のことを思い出しながら、皆に今年自分に起こったことを報告したのだろう。

この日の権平宛ての書き出しは、「一筆啓上仕候。寒気節益御安養御座成らるべく、大賀に奉り候。」で始まる。それに対して、乙女宛ては、「おとめさんにさし上げる。」で始まる。一家の長としての兄権平に払う敬意と、非常に近い存在である姉乙女へ対する龍馬のスタンスの違いが表れており、比較すると面白い。

乙女宛てには、高千穂峰への登山の様子を書いて、非常に楽しげな手紙になっている。実は、この画をよくご覧いただくと、画を描く前に薄い墨で下書きをしているのが分かる。下書きの時は、山の頂を高く書きすぎたため、天の逆鉾が描けなくなり、清書する時に頂を少し下げて描いている。こんな画を描くにも下書きをするとは、かなり細かい人だと思う。



山頂や噴火口に下書きの跡が見られる

手紙に表れる人柄

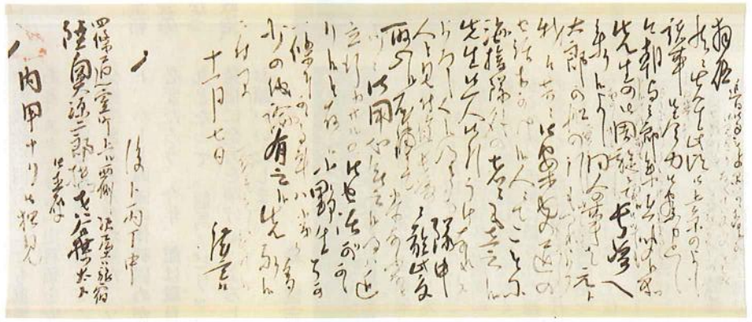
本稿では、展示内容の一部を紹介したい。千頭清臣著『坂本龍馬』に、幕臣・大久保一翁の龍馬評が載っている。「龍馬は土佐随一の英雄、謂わば大西郷（西郷隆盛）の抜目なき男なり」と。大きな度量を持つ点では、西郷と比肩するが、西郷より細かくて、抜け目が無いのだろう。こういう点が、手紙にもよく表れている。ちなみに、写真やお龍の回顧録に見る龍馬にもこれらは表れている。

貧乏性か？と思いたくなる

それから、龍馬の手紙の多くに共通するのは、上下左右の余白が非常に少ない点である。冒頭は、2行程度余白をとって書き始めることが多いが、あとで追伸を書き込むことも多いため、冒頭の余白は消えてしまう。また、行間も狭い。当館へは、龍馬の手紙の偽物が持ち込まれることもあるが、中には行間が広いものがある。龍馬の場合、もう一行入りそうなくらい行間を取ることは絶対にない。貧乏性か？と思いたくなるが、家は裕福だったはずなので、単に筆まめで、伝えたいことが尽きないのだろう、と想像する。

このように、龍馬の手紙には様々な特徴が含まれている。その特徴を分析し紹介することによって、常設展では伝えきれない龍馬の人柄を知ってもらいたい。

三浦　夏樹



11月7日陸奥宗光宛（追伸が冒頭の余白に収まらず、狭い行間に書かれている）

―「分かりやすく伝える」工夫を続けていく―

「“土佐藩探索御用役”がみた幕末」展総括

土佐藩京都藩邸史料が当館に収蔵されて3年、このたびようやくお披露目の展示を開催することができた。併せて史料の整理作業が終了、目録を整備・刊行するはこびとなり、史料を研究者に公開する体制が整った。

カラフルなパネルで工夫

藩邸史料の初めての本格的な公開の場となる今回の展示では、龍馬が襲われた寺田屋事件、池田屋事件、土佐勤王党の大獄、足軽松丞の探索報告、京都における土佐藩士の行状、砲術操練などのトピックにより史料を陳列した。古文書ばかりが並ぶこととなったため、イラストや背景色を用いたカラフルなパネルを製作し、観覧者にわかりやすい展示となるよう心がけた。長い古文書を読み下し、内容を要約して、四コママンガのように仕立てたパネルも製作・展示した。ご覧になった来館者からは「分かりやすい」「興味がわいた」など、アンケートでも好評をいただいている。古文書を扱う展示では、今後もこうした「分かりやすく伝える」工夫を続けていきたいと考える。

関連事業としては、公益財団法人山内家宝物資料館館長・渡部淳氏をお招きし、「幕末の土佐藩邸～京都藩邸史料を手がかりとして～」と題した講演会を10月7日（日）に開催した。また、学芸員による歴史講座として、①「龍馬が襲われた寺田屋事件報告書を読む」、②「野老山吾吉郎が関わった池田屋事件供述書を読む」、③「渡辺松丞の探索報告書を読む」の3回をそれぞれ実施し、実際に藩邸史料を読解・解説した。渡部館長の講演では、幕末の土佐藩邸について、史料を用いた実証的で詳細なお話を伺うことができた。

展示オープンと同時に刊行した『土佐藩京都藩邸史料目録』は600円、当館ミュージアムショップおよび通信販売で取り扱っている。

藩邸史料の研究は緒に就いたばかり、今後詳細に史料を読み解くことでさまざまな新事実が明らかになる可能性は大きい。

亀尾　美香

石田英吉ご子孫から史料の寄託を受ける

～当館初の英吉本人の書も～

本年度7月下旬に、石田英吉のご子孫から連絡を頂き、10月には、史料を寄託していただくことになった。寄託してくださったのは、高山智博氏で、奥様が石田英吉の直系に当たる。公文菊僊が描いた龍馬肖像画と、三条実美が石田英吉に贈った歌の掛け軸が2本、そして、石田英吉自身の書（額装）の4点を寄託してくださった。

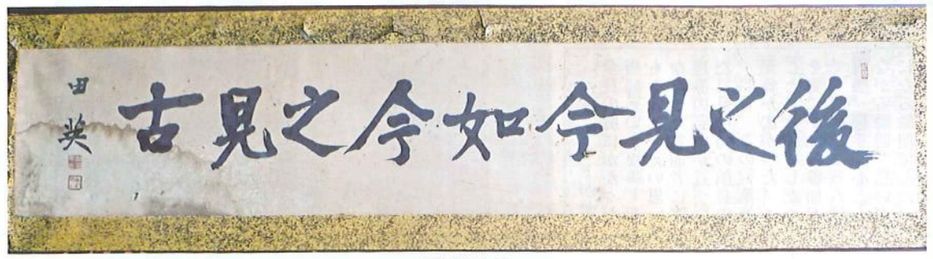
石田英吉が所蔵していた主な史料は、国立国会図書館の憲政資料室に寄贈されており、その中には、新政府綱領八策も含まれている。今回寄託いただいた4点は、ご子孫が国会図書館に寄贈せずに手元に置いていた4点で、大変貴重なものである。

特に石田英吉本人の書は、これまで当館には一点もなかったので、大変ありがたい。石田英吉は、土佐藩の安芸郡中山村（現在の高知県安田町）の出身で、亀山社中・海援隊では砲手長などとして活躍した。青年期には、龍馬の長姉千鶴が嫁いだ高松順蔵に学問を習っており、龍馬とは非常に縁が深い。

維新後は、明治政府に出仕し、秋田県令、長崎県令、千葉県知事、高知県知事などを歴任した。今回寄託いただいた三条実美の歌は、石田英吉が秋田県令を務めていた頃に贈ったものである。

現在2点を修復に出しており、仕上がり予定は2月末なので、3月以降にお披露目の展示を行う。それ以後は、安田町や海援隊の展示の際に大いに活用させていただきたい。

三浦　夏樹



石田英吉書

900人が集まった！ハンド・イン・ハンド イベントの残したもの

11月18日（日）、1歳を迎えるシェイクハンド龍馬像と84歳の桂浜龍馬像の間を500人の握手でつなぐイベント「レッツゴー！ハンド・イン・ハンド」を開催した。予想を大きく上回る900人もの方にお集まりいただき、イベントは大成功。桂浜一帯が900人の笑顔で包まれました。〝手をつなぐ〟ことで、人が人を思いやり助け合うことの大切さ、人と人が力を合わせることで一歩前進する勇気を持てることなど、参加者それぞれが〝龍馬の志〟を感じるイベントとなりました。

尾﨑　由紀

スタート地点には坂本家9代目当主・坂本登さん。

受付開始前から桂浜龍馬像前は多くの人で賑わった

整列完了　桂浜水族館のペンキンもリヤカーで参加

県交通バス通過→県道封鎖

赤ちゃんもシェイクハンド！

握手の鎖は途切れることなくどこまでも続き・・・
シェイクハンド龍馬像まであと少し

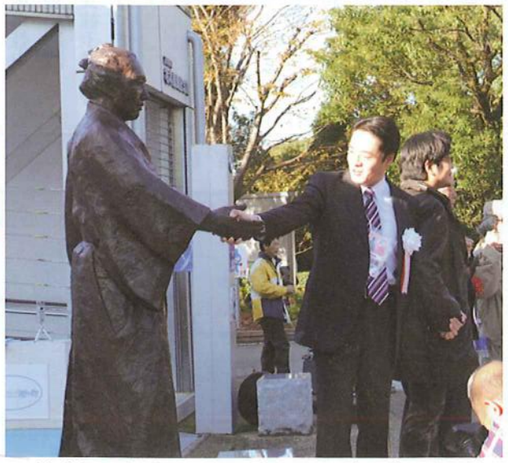
シェイクハンドは山の中へも続き・・・

よさこい踊り子も笑顔

少年野球チーム“浦戸ドラゴンズ”も

“日本人の心”着物でシェイクハンド！
みんなの心もつながった！

菩島保育園・りょうま組の子ども達と高知ファイティングドッグスのマスコット・ドッキーも


尾﨑高知県知事がシェイクハンド龍馬像と握手！

「このカードが参加者全員の胸にかかったら本当にえいよなぁ。記念にもなるし、えい思い出になる！」参加者に渡す整理券の完成が近づいていた11月中旬の館長の言葉。

当日、この言葉通りの光景が広がった。エリアごとに色分けしたカードを胸にかけ、参加者全員で〝現代こころ八策〟を復唱。握手で心と心がつながる瞬間、思いが一つになる瞬間でした。

山中　真優

龍馬学習に熱い視線

龍馬だからこそできる！子供らに「生きる力」育む

高知市立昭和小学校　教諭（研究主任）　小川　晶子

昨年11月9日、昭和小学校を会場校として高知県では初めてとなる全国小学校社会科研究協議会研究大会が開催され、500名を超える方々が全国より来校されました。幕末から明治にかけて、日本の変遷にかかわるたくさんの人物を輩出したこの高知県、南国土佐。6年生の歴史学習では、新しい時代の礎を築き幕末を駆け抜けた風雲の志士、坂本龍馬を学習に組み込み、龍馬学習指定校として坂本龍馬記念館からの協力をいただきながら3年間研究を続けた成果を授業として公開・提案しました。思考力・判断力・表現力育成を目標とした授業では、子どもたちの活発な意見交流の姿に大変多くの称賛の声をいただきました。「龍馬学習で必ず子どもたちは変化する」それほど坂本龍馬という人物は「影響力のある人物」なのだと、私自身が改めて龍馬の魅力に感動を覚えているところです。

真剣に“龍馬”を話し合う子供たち

小さい頃は泣いてばかりのごく普通の男の子だったと言われる龍馬がなぜあれほどの偉業を成し遂げることができたのか、それは彼の探究心の強さ、行動力、コミュニケーション能力の高さ、そして何より他者を考え思いやる愛情の深さであると私は考えています。あの封建的な時代に「自由」と「平等」を掲げ、脱藩し日本を洗濯しようと駆け巡り世界情勢にまで目を向けていた龍馬の思考力、行動力には驚きとともに感動を覚えます。様々な諸問題について対応できる幅広い知識と柔軟な思考力・判断力は、今の子ども達に求められている力そのものであり、これはまさに「生きる力」であると思います。龍馬の生き方は真似できないけれど、彼の生き方から大切な「何か」を学ぶことはできるかもしれない、そんな思いから授業をスタートさせました。

子供たちの確かな〝変化〟

今回、龍馬が1867年海援隊発足時につくった「海援隊約規」について研究し授業に取り組みました。海援隊約規は、海援隊を組織運営するために仕事内容や約束事、心構えなどを記した規則であり5則から成っています。授業ではこの約規を教材として子どもたちに資料を読み取らせ、江戸時代の社会的事象や事実、また龍馬の生き方をふまえながら約規に込められた「新しい考え方」を解いていきました。子ども達からは、「自分のしたいことができなかった時代に科目を選び学習することが新しい」「入隊の条件には佐幕派、倒幕派など関係なく自分の意志で入るということがこの時代にはすごいことだ」「仕事と学問を両立しながら自由に働き、外国に負けない海援隊をつくりたかったと思う」など様々な意見が出され、この海援隊約規に込められている「自由」「平等」「協力」「自立」などの龍馬の思いや願いが、次は国づくり（船中八策）につながること、また今の時代にもつながっていることをしっかり読み取っていました。「一人ひとりの意志を大切にすることは人権の考え方につながる」と記述していた子どももいて、読み取りの深さに驚かされたことでした。以前より積極的に調べ学習をしてくるようになった子、歴史の本を購入し片時も離さず調べている子、社会科が大好きになったという子、発表が意欲的にできるようになった子など、龍馬学習は子ども達に「生きる力」を与え、確実に変化をもたらせてくれました。これこそ「龍馬だからこそできる龍馬の魅力」であると感じています。子ども達同様、私自身今後も龍馬を追究し、学びを深めていけたらと思っています。

盛り上がった全国小学校社会科研究協議会研究大会（昭和小学校）

今回、授業を計画するにあたっては、たくさんの方々にご支援いただきましたことを心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。最後に、龍馬学習後の子どもの感想をご紹介します。「龍馬の学習では、志を持って仲間や人を大切にしていくことを教わった。また一歩一歩コツコツと努力をすれば目標を達成できることもわかった。どんな時も人を大切にし、古い考えにとらわれず柔らかい頭を持っていた龍馬。私も人を大切にし、自分の意志をしっかり持ちながら龍馬に近づいていきたいと思う。この龍馬学習によって、私は以前より確実に龍馬が、そしてこの高知が大好きになった。」

拝啓 龍馬殿

平成24年9月21日～12月20日

93通

今日、夫と息子（今日が8才の誕生日でした）と桂浜を一時間かけて散策しました。私は宮城県出身、ふるさとの関上、石巻を津波に奪われて、心安く海を見ることができなかった私ですが、この桂浜の美しい水平線と砂浜を見ながら、いろいろな事を思い、後ろを振り返ることよりも前を見て、日々を過ごしていくことの大切さを強く感じました。息子にも龍馬が感じた大いなる意思を感じて成長して欲しい。連れて来てくれた夫にも感謝して、共に与えられた命を全うしたいと思います。ここから見る桂浜は美しくどこまでも遠く続いている。人の人生のようです。私の人生も美しく、心優しいカーブを描いて、希望に満ちた未来へ。笑顔いっぱいに生きていこう！

（10月7日　大阪　K・H　42歳　女性）

初めて龍馬さんの字や思いを体で感じました。小さな世界から大きな世界へ飛び出して、日本を変えようとした龍馬さんの力強い意思は、今の世の中でも、未だなお欠けている部分だと感じさせられます。私ももっと勇気をもって飛び出してみようたいにおちもらった気がしします。強い気持ちはどこにいっても無敵なのではと思える年になりました。ここで龍馬さんに会えてよかったです。

（10月8日　無記名）

目の前に広がる〝あっとうてき〟な海に言葉もありません。あなたが見ていた景色です。同じ景色をながめながらようやく心が落ち着きました。思いがけないつらい事が続き、どうしようもない日々でした。そんな時に、想い続けたあなたの〝ふるさと〟を訪れる事となりました。あなたがあこがれた太平洋のむこうへの希望を目の当たりにし、波の音を聞きながら、ようやく笑顔となり「明日から絶対笑ってやる」と思えました。心から「ありがとう！」もっともっと笑えるようになって又来ます。

（10月15日　兵庫　J・S　48歳　女性）

55才を前にして、又、貴男に会いに来ました。乙女姉さんより厳しい私の姉（るみ子）も係長になり頑張っています。又、歴史好きな長女（花菜）も今は一児の母として毎日頑張っていますよ。私は消防本部次長として昼夜、住民の生命・財産を守るため、又職員に対しては何事にもチャレンジするよう教育しています。この教えは貴男が私に教えてくれた事ですよ。さあ、又明日から消防署で龍馬を演じる私を見守ってください。又来ます。

（10月20日　福岡　Y・U　54歳　男性）

私は強いのに人を殺さないというか尊敬します。たん生日もうすぐですね！高知県民一同おいわいをしてくれると思います。

（10月26日　高知　Y・N　11歳　女子）

あまりにも書きたい事が多すぎて…あまりにも感謝の気持ちが深すぎて…何も言えません。何も書けません。ただありがとう…、その一言だけです。

（11月2日　熊本　S・F　63歳　女性）

私は日本史を小学校4年生の時に学びました。その時、龍馬の写真を見てすごくりりしいと思いました。どんな場面でもブレずに日本を変えようとしたあなたにメロメロです。私ももっと自分のいしを持って、しっかりと龍馬様みたいな大人になります。その時にはもっと龍馬様を好きになっていると思います。楽しかったよ龍馬記念館。バイバイ。

（11月3日　東京　R・M　15歳）

お元気でお過ごしでしょうか？今の日本の政治の様子をどのようにごらんになっていますか？あなたが命をかけて礎を築いた日本が、どうも世界でうまくいっていることにイライラ感をおもちではありませんか。ノラリクラリの小田原評定。きまらない政治。あなたのような決断の人がまたあらわれないのでしょうか？

（11月9日　東京　F・I　64歳　男性）

龍馬さん、お誕生日おめでとうございます。偶然にも私の初ひとり旅、初高知県の旅の中日があなたの誕生日でした。碑を前生地にも足を運びました。碑を前に「なぜあなたほどの偉大な方が亡くなってしまったのだろう？」と思いました。その限りある命、人生だからこそ、志高くその命を全うし、己の命を使い切らないといけないのだと感じました。私は今年で22歳になります。幼稚園教諭を目指し、現在内定の結果待ちです。子どもたちへたっぷりと愛をもって接し、龍馬さんのように夢大きく、人との繋がりを大切にし、自分を信じることを伝えていきたいと思います。いつも力をありがとうございます。これからも日本を世界を見守っていてください。敬具

（11月15日　神奈川　S・I　21歳　女性）

ここは館長の部屋　森　健志郎

思いの一冊

寒さが増して空気が澄んできた。冬の一日が始まる。朝出勤して、館の窓から水平線を見ているとこの夏、台湾の李登輝元総統を訪ねた時の事が頭に浮かんできた。そうさせるのは連日のごとくマスコミがわめき散らす混乱世相のせい、今朝の朝刊もそうであった。が、それにしても水平線上に浮かんだ李元総統の表情は実に鮮明で、日ごとよみがえる感じである。龍馬を語る李元総統の迫力は取り巻いた我ら「坂本龍馬財団」の35人をあっという間に〝李登輝ワールド〟に引き込んだ。「皆さん！今こそ21世紀の龍馬を育てないといけない。時節到来です」最後の決め台詞に全員が〝うんうん〟とうなずいたものだ。

35人は〝龍馬つながり〟だが、年齢も仕事も違うし住んでいる地域も同じではない。多分嗜好も異なるはずなのに李元総統に関しては誰もが不思議に納得する。なぜだろう？それが知りたくて帰国後の皆さんに台湾旅行参加の感想文を書いてもらった。1週間で全員が揃った。読ましていただいて納得した。

弱気を励まされた若者がいる。人生の目標、姿勢を見つけたのはギター奏者。フリーライターの女性は生きることのヒントをもらった。「日本のリーダーになってほしい！」ずばり本音でせまった宝石関係の会社社長がいる。「平和の架け橋になる」自ら未来宣言をした女性編集者・皆さん李元総統にパワーをもらったのは間違いない。

とまあそんな経過を経て「目を覚ませ日本！21世紀の龍馬よ！」台湾・李登輝元総統〝魂〟の提言、熱い一冊が生まれた。第一章は李元総統の講演、そして第2章は参加者の声である。是非、読んでいただきたい。

水平線上の李登輝元総統が本の表紙と同じ笑顔である。

書きたいことは多いけど、残念ながら日本語がまだ下手なので申しわけありません。どうしてこんな遠い国の昔の人物に興味があるかと聞かれたら、私もよくわからないので返事がふくざつになる。その一番の理由は、自分の国が困難なじょうたいにおちいったときに、龍馬殿はきぼうをうしなわなくて、国の辛い迷わくの答えをさがしつづけた。私の国のじょうたいもけっこう悪くなった。けいざいの不景気がくるしくなったから、みんなきぼうをなくすおそれをもっています。高知にもはじめて来た。着いたとたん太平洋や秋空の美しさに心をうたれた。さすが龍馬殿、こんな雄大な景色の前で生まれたのだろう。龍馬殿の心やたましいも広かったとおもいます。こんな気持ちをすてずに帰国時に国のきぼうや自由のためにがんばりつづけたい。私のふるさともみなとまちだから。お誕生日おめでとうございます。Moltes gracies（カタルーニャ語で「ありがとうございます」）

（11月15日　東京　V・J　21歳　男性）

今日は貴殿の誕生日、そして私の誕生日です。敢えて今日を選び娘と参りました。やはり龍馬さんは私にとっては大切なお方、常に手を合わせてこの国、そして土佐の一人として感謝しています。11月15日、私はこの日が自分の誕生日であることを誇りに思っています。いつも龍馬さんを心に描き、そして世界に誇る龍馬さんを日本の国に戴いていることに感謝と感激の思いで日々を過ごさせて頂いています。ありがとうございました。ありがとうございました。

（11月15日　高知　M・M　81歳　女性）

高知へ主人の退職とともに帰ってきました。私にとってはやって来ましたかな？これから親しくなるには土佐弁を覚えるのが一番かも。龍馬さんは心から愛していたようですね。主人も負けず劣らずと思います。これからの人生、力一杯、龍馬さんとお龍さんのようにまんでゆきたいものですね。どこからか見守っていてほしいです。

（11月15日　高知　T・Y　62歳　女性）

「志を持って」十年後も健康で生きているでしょうか。大震災から復興している東北を念願しています。これからも自分ができることボランティア活動で地域に貢献していくことを誓い、人生有難うで終わりたいものです。海はいいですね。今日も光り輝いていますよ。

（11月16日　岩手　T・Y　65歳　女性）

現在（いま）の日本に対して思うことを聞かせてください。

（11月16日　東京　H・M　49歳　男性）

今日は雨の中、龍馬様に会いに来ました。私は龍馬様が大好きです。若くして亡くなり残念で残念でなりません。龍馬様が居てくれたら、今の社会もっと素晴らしい世の中になっていたでしょうに…。国会は解散し、政治家は自分の身が可愛くて、とんでもない方向に向かっています。こんな時、龍馬様の機会方が居てくれたらどんなにか明るい日本になってた事と思い、とっても龍馬様が恋しいです。私も頑張って命あるかぎりまた会いにきます。

（11月17日　愛媛　T・S　71歳　女性）

龍馬、わしの思いを聞いてくれるかえ。わしは今回高知大学の入試を受けに来たぎゃ。けんど、うまく試験ができんかったがじゃ。まことにつらかったがじゃ。わしは龍馬の日本を大きく変えようという志に感動し、わしも龍馬のように高知で大きな志を持ってこれからの人生を始めようと思ったのに、今回の入試でそれが果たせんと感じたがじゃ。でも龍馬、わしはおまんに本当に感謝したるがじゃ。おまんのおかげで少し大人になれたように思えたしをここまで変えてくれたがじゃ。本当に感謝しちょる。やっぱり高知の海はえ～の～。わしも海が大好きじゃ～、じゃけ～龍馬、もしまた高知へ来たら、わしと一緒に海を眺めてくれるかえ。もしいなら楽しみにしとるきのう。その日まで、またの龍馬。

（11月17日　岡山　T・T　18歳　男性）

生まれて半年の子どもを連れてきたのが6年前、子どもは今年小学生になりました。龍馬大好きなパパといろいろ話をしながら見ています。私も嬉しくなりました。

（11月18日　愛媛　M・U　45歳　女性）

シェイクハンドのイベントに来ました。森館長の「現代こころ八策」には胸がつまりました。みんなぁが笑って暮らせる国。龍馬さんに魅かれる人はその国。龍馬さんに魅かれる人はそのような志に共感するのだと思いました。素敵なイベントをありがとうございました。

（11月18日　兵庫　A・U　女性）

＊＊＊編集者より＊＊＊

この「拝啓龍馬殿」には“海”という言葉がよく登場します。海と言えば夏という感じがしますが、実は秋から冬にかけて、水平線がくっきりと浮かんで心が洗われるような海を見ることができます。この海を見て龍馬の志を感じ、勇気をもらったという方もたくさんいらっしゃいます。龍馬も眺めた冬の太平洋、ぜひ一度見に来てください。　尾﨑　由紀

11月15日は〝龍馬の日〟手筒花火とよさこいがコラボ

11月15日は龍馬の生まれた日であり、命日、そして龍馬記念館の開館記念日でもある。当館では「今日は龍馬の日」と題して、記念館の入館料を無料とし、『竜馬がゆく』リレー朗読や、シェイクハンド龍馬像と一緒に撮影した写真を募集したコンテスト、昨年度ご好評いただいた手筒花火など、様々なイベントをおこなった。

午後6時。手筒花火の会場・桂浜水族館前の浜辺は30分前にもかかわらず大勢の人で溢れかえっていた。危険を避けるために敷かれた規制線ぎりぎりの位置には50台以上のカメラがずらっと並んでいる。集まった人は300人を超えていた。2回目の開催にしてこれだけ注目されるイベントとなったことが嬉しい。今回は、この夏よさこい祭りに初参加のチーム「桂浜・龍馬プロジェクトぜよ！」とのコラボ。真っ暗な浜辺をライトアップした中で踊り子たちが舞う姿に、観客からは「冬のよさこいもえいねぇ」との声が聞かれた。よさこいで盛り上がった空気をそのままに、手筒花火の登場である。打ち上げ花火のような派手さはない。吹き上がる火柱に、手筒を抱える花火師の姿がシルエットとなって映しだされる。火柱の勢いを体全体で受け止めるたくましい姿に惚れ惚れする。さらに今回は「白い手筒」が登場。オレンジ色の火柱が途中から白色に変化し大きく吹き上がると、この日一番の歓声が上がった。

尾﨑　由紀

海の見える・ぎゃらりい

３人の書家と合作

■「風」「海」「雲」新春を飾る ３人の書家のコラボレーション

ぎゃらりいの新年は新春「龍馬と３人の書家展“風”と“海”と“雲”と」で始まる。高松紅真さん、藤田紅子さん、竹内暮雪さん３人の書家の方々のコラボレーション。「３人の書家に、新春を飾って頂こう」という企画から共同制作をお願いした。

昨年12月、記念館講義室が制作現場となった。用紙を張り合わせるところから始まり、部屋中に墨のにおいが広がってゆく。作品は、縦2.4メートル×横3.6メートルの用紙に高松さんは「風」、藤田さんは「海」、そして竹内さんには「雲」の字を書いて頂いた。そしてそれぞれの文字の下には、龍馬を思う言葉が添えられている。筆が動く時間はほんの一瞬、その中に３人の気迫が凝縮されている。三人三様のスタイルで、真っ白い用紙に１つのコラボレーション作品が誕生した。大迫力である。　中村　昌代

■「第3回 高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会パネル展」開催迫る！

２月１日より１ヶ月間、第３回「現代龍馬学会パネル展」を開催します。

龍馬や彼に関わる人々、当時の文化等に焦点をあて、現代龍馬学会員が自由な表現で多角的に検証・考察するパネル展。坂本龍馬記念館に来館されるお客様に、現代龍馬学会の活動を幅広く知り、ご賛同いただく機会として実施し、これまで好評をいただいている。

そんな過去第１回、第２回のバラエティに富むタイトルを振り返ってみるだけでも、『奇異の想いをなしたり－高知の人々が見たおりょうの姿－』、『平成の龍馬になる条件！－３つの南学精神－』、『龍馬が鳥の目を持った－柴巻の八畳岩－』等々、各会員発表者独自の目線で捉えた“龍馬”、“幕末”が垣間見えます。

平成24年２月 第２回現代龍馬学会パネル展 展示風景

さて、第３回パネル展の内容は…？

●多くの写真で見せる「台湾・李登輝元総統が龍馬を語る感動の訪問記」

● 2012年11月高知市立昭和小学校で開催された「第50回全国小学校社会科研究協議会研究大会」

●かつて土佐藩山内家に伝来したある刀の鐔「信家作・一心不乱の鐔」等をめぐるエピソード

他、今回も新しい観点から学び前進する会員達の活動を紹介いたします。

日時：平成25年２月１日(金)～28日(木) ９時～17時

場所：坂本龍馬記念館２Ｆ 海の見える・ぎゃらりい　手島　ゆか

■「イラスト展にパフォーマンス、“百花龍乱”が龍馬月間を賑わす！」

昨年の11月、12月は「龍馬と幕末イラスト展“百花龍乱Ⅱ”」を開催した。一昨年に続き、楠本剛さんと永野尋美さんそれぞれのタッチで描かれた龍馬の世界が広がっている。楠本さんのイラストは男性的で少々泥臭い表現の中に、こよなく龍馬を愛する強い気持ちがストレートに伝わってくる。そこに永野さんの愛らしさと少年ぽさ、そして女性らしさが入り混じった作品が加わり、面白いイラスト展となっていた。

「龍馬と幕末イラスト展“百花龍乱Ⅱ”」 会場風景

また会場で入場者のお迎えは楠本さん似の腕組ポーズの龍馬人形。ほっとさせられる。その二人のイラスト作品に色を添えているのが、夏のよさこい祭りに参加した地元チーム「桂浜・龍馬プロジェクトぜよ」のスナップ写真。もちろん楠本さんも参加した。イラストとスナップ写真が“百花龍乱”の雰囲気を盛り上げる。まだある。一昨年ここで旗揚げした幕末小劇団「志士座乙女座」の公演「乙女ねーやん怒りの鉄拳」。上演時間は30分と短いがそれだけに“真剣勝負”だ。座長は楠本さんで龍馬と後藤象二郎の一人二役。永野さんは近藤長次郎、乙女ねーやん役は谷口さえ子さんである。もう一人岡田以蔵役の龍斗さんは剣さばきを“危険だから”とジャグリングに変えた。

「幕末小劇団“志士座乙女座”」の公演風景

皆さん練習不足を気合で克服である。観客の喝采をあびていた。　中村　昌代

入館状況

2012年12月20日現在（開館以来7,663日）

◆総入館者数　3,313,043人
◆最多入館　(2010年５月２日) 6,686人
◆最少入館　(2004年10月20日、台風のため) 8人
◆2012年度最多入館(2012年５月４日) 3,119人
◆2012年度最少入館(2012年6月19日)　57人

編集後記

一年の終わりだという気がしない。大晦日、総選挙に象徴される平成24年である。日本国中というより世界が地球が、どうも丸ごと落ちつかない。龍馬記念館はそんな世情に敏感に反応する。入館者の皆さんの思いは日常のアンケートや、龍馬への手紙「拝啓龍馬殿」に綴られる。「21世紀の龍馬」登場を待ち望む声だ。この一年その声に背中を押されての編集であった。期待に応えることが出来たかどうか？振り返ってみると、てまえみそかも知れぬが80点はいただけるのではないだろうか。飛騰81，82，83号を繰ってみた。館のチャレンジ精神に狂いはない。新年のテーマはやっぱり“手をつないで前進”である。本年もよろしく。　(モ)

館だより“飛　騰”第84号（年４回発行）表紙題字：書家 沢田 明子氏

発行日　2013(平成25)年1月1日
発　行　高知県立坂本龍馬記念館

〒781-0262 高知市浦戸城山830
TEL (088)841-0001　FAX (088)841-0015
http://www.ryoma-kinenkan.jp
「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間　9:00～17:00　年中無休
入 館 料　一般 500円・高校生以下無料
身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者１名
高知県・高知市長寿手帳所持者は無料

館だより「飛騰」は、郵送料のみのご負担でお届けいたします。ご希望の方は、90円切手５枚をお送りください

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会

私のテーマ

龍馬のもう一人のお爺ちゃんの墓

現代龍馬学会 植田　英

人々に忘れられていた場所

私には密かな楽しみがある。それは坂本龍馬のもう一人のお爺ちゃんが眠る墓所の清掃をしている事である。

龍馬の母方のお爺ちゃんは坂本八蔵直澄であるが、お父さん八平は婿養子なので、父方のお爺ちゃんは潮江村の山本覚右衛門という人になる。

龍馬の墓は京都霊山護国神社にあり、龍馬の両親や姉乙女の墓は高知市の丹中山に祀られていることはだれもが知っている。

全国の龍馬ファンはこぞって丹中山の墓を訪れるが、もう一人のお爺ちゃんが眠っている潮江山の山本家の墓所の存在を知らない。

私が山本家の墓所を探しあてたのはもう15年前の事であった。

高知の郷土史家である山田一郎著『坂本龍馬・隠された肖像』の本に、龍馬や姉乙女の体格からして、山本家の血を多く引き継いでいるにちがいない。にも拘わらず龍馬ファンはこぞって丹中山の墓地を訪れる。片手落ちではないか、というような内容の記載があった。

早速、本を片手に潮江山の山中を探し回った。2時間ほどかかってやっと見つけた。その事を全国龍馬ファンの大会で得意げに話をしていたら、東京龍馬会のMさんがぜひ案内をして欲しい、と高知に来られた。

墓所近辺の鏡川風景

山本家の墓所は1メートル以上の高さの萱に覆われていて、それを見たMさんは「かわいそう!」と独り言をつぶやいた。

私はその言葉にショックを受けた。地元の龍馬のファンがこんな現状をこのまま放置して良いものか、と思い行動を起こした。

まず、郷土史家の山田先生に相談した。他人が放置されている山本家の墓所を清掃しても良いものだろうか、先生は地元の町内会などに計っていただき、清掃の許可をもらってくれた。

山本家は途中から桑津と名前を変えている。子孫は高知県には存在せず、噂によると鹿児島におられるが、詳細は不明とのこと。

共に眠る者たち

この墓所には龍馬のお爺ちゃんの墓だけでなく、日本最初のキリストの司祭沢辺琢磨の父や母、弟の墓もある。

沢辺琢磨の旧姓は山本卓馬で、龍馬とは二従兄弟の関係になる。

山本卓馬は江戸で、酔った勢いで商人の落とした懐中時計を質屋で金に換え酒を飲んだ。それが判明、土佐藩から切腹を申し渡されたが龍馬と武市の粋な計らいで北海道へと逃亡する。

函館で宮司として仕えるが、ロシアのキリスト教の司祭ニコライを、キリスト教は日本を滅ぼす異教だとし殺害に行くが、ニコライに説得され、龍馬と同じように弟子となる。

琢磨は東北を中心にキリスト教の布教運動に邁進する。そして東京神田のニコライ堂建設にも貢献する。

山本家は長男の卓馬が罪を犯した事により、二男の三治に後を継がせ、姓を山本家から桑津に変更し、名前を桑津二兵衛と改名した。

整備されたお墓

清掃を引き受けて以来、現在まで年に2回春と秋の彼岸の前には必ず清掃するようになった。清掃後には、しきび、花と線香を供えている。

10年前には墓の花筒の取り換えもしたし、墓所の入り口には「ここは龍馬のお爺ちゃんが眠る墓所である」と云う看板も設置した。

最近、寄る年波に勝てずか、山の途中で息切れをしてしまう始末である。ぼちぼち墓所の清掃というか、墓の管理してくれる後継者を育てなければいけない時期に来ているのではないかと、思っている今日現在である。

話題人インタビュー Let's go! Hand in hand

～900人の“握手の鎖”～

高知県立坂本龍馬記念館長 森 健志郎さん

「ひたすら前へ！」

2分間のドラマ～つなぎ合う心と心

龍馬脱藩150年の昨年11月18日、日曜日午前8時32分。天気晴朗。桂浜の龍馬像から記念館前のシェイクハンド龍馬像までの540メートルが、900人の人たちによる“握手の鎖”でつながった。

時間は8時34分まで。公道を横切る催しに警察から許可された時間はわずか2分であった。その2分間のために地元はじめ全国各地から大勢の人がやってきたのである。さまざまな顔があった。900人がつながる。瞬間、900人の笑顔がはじけた。

その仕掛け人、森健志郎館長に聞いた。

人と人の鎖で二つの龍馬像をつなごう

――あれから暦が替わっても、まだ感動さめやらない様子ですね。

いやぁ、皆さんのおかげ。感謝しています。当日まで人が集まるかどうか、不安で不安で仕方なかった。だが、当日は予定の2倍、900人ものが来てくださった。本当にありがとうございました。しかし、面白かったのぉ。

――どうして、いつから、桂浜の龍馬像と記念館前の龍馬像を“握手の鎖”でつなごうと思ったのですか？

夏ごろ、記念館の今後や課題、20周年を超えて21年目の記念館について考えていた。

記念館前のシェイクハンド龍馬像を見ていたら、皆さんが抱きつかんばかりに握手している。老若男女だれを見てもにっこり笑顔ぜよ。

すっかり館の名所になってきたなぁ。シェイクハンド像ができて1年、20万人を超える人が握手したなぁ。そんなことを考えているうち、何かせないかん。シェイクハンド像1歳の誕生日を祝わないかん、という思いが突然むくむくと湧きあがってきた。桂浜の84歳の像も一緒に祝わないかん。シェイクハンドだ。人と人の鎖で二つの龍馬像をつなごう。そうと思うた。

――つなぐんですね。シェイクハンドってどういう意味があるのですか？また、シェイクハンド龍馬像とは何ですか？

シェイクハンドとは、“仲良し”ということ。今一番大事なことぜよ。手をつなぎ、心を通い合わすのが、友だちになるということよ。ほんまの友だちはけんかにならん、理解し合える。この混迷する世相で一番必要とされていることじゃないか。

桂浜の龍馬像が台座の下に降りてきて、手を握らせてくれるのがシェイクハンド龍馬像ぜよ。手を伸ばして「いらっしゃい」と言う。見下ろしていた龍馬がみんなぁのところに来てくれたがよ。

シェイクハンド龍馬像を作ると決めたとき、制作者の三人の先生たちに「館長は彫刻家の心が分からん」と言われた。「像には触らず、離れて観賞して作者の心を探るのが彫刻の芸術性。しかも共同で作るものではない」とも言われた。しかし、しばらく考えて後、「龍馬やき。一緒にやってみる」ということになった。「龍馬やき」とね。それが触れる像の誕生やったね。

私心なく人に尽くす

――森館長にとって龍馬とは？

「私心なく人に尽くす」というところが大好きやね。逆に言うと、いかにこの世の中が私心だらけかということだろう。今も昔も龍馬の周りには私心ある人が集まってくる。しかし、龍馬は結果的にそうじゃない方へ引っぱってくれる。それが最大の魅力ぜよ。

毎日龍馬に触れていると、何か分からんが、自分自身が龍馬的な考え方になってくる。

今まで、尊敬する人は？って聞かれたら、学生時代には武者小路実篤だと答えていた。その原点には、私がクリスチャンだということがある。小学生から高校生の半ばまで、教会や日曜学校に通い、おふくろや神父さんの話からいろいろ学んだ。皆は“えせクリスチャン”だと言うが、モーゼの十戒の話を聞き、聖書をよく読んだ。悪いこともしたけんどねぇ(笑)。

今そんな小さい頃のことを考えても、教会で受けた影響が龍馬への思いに結びついているのではないか。龍馬は人間の本質的なところに結びついている人だと思う。

――そこまで敬虔なクリスチャンだとは知りませんでした(笑)。原体験が龍馬に結びつくというのは面白いですね。

今までいろんな講演をしたけんど、龍馬のことは皆が熱心に聴いてくれる。特に“出会い”について話すと、感度がいい。今までの私の人生にも節目節目にいろいろな出会いがあった。最近では龍馬がいい出会いをくれる。新聞社の仕事だけでは生涯出会えなかったであろう人たちに出会う。すべて龍馬が仲介者ぜよ。

今最も心に残る人は、李登輝さん(台湾元総裁)と孫正義さん(ソフトバンク社長)。龍馬がこの二人に出会わせてくれた。政治家と経済人という違いはあるが、二人に共通しているのは生きる信条に龍馬がおる。龍馬に影響を受けて、龍馬の如く生きている人たちだということだろう。

私は記者時代、サツ回りで“人の善悪”を見て、鍛えられてきた。本当にいろんな人に会ってきた。けんど、この二人には今まで会ったどんな人とも違う雰囲気、感覚、オーラがある。やっぱり龍馬のおかげで出会えた人たちぜよ。

――そういう流れの中で、今回のハンドインハンドの行事が誕生したんですね。

私が館に来て7年余り。その集大成が今回のイベントやったと思うね。近年を振り返ってみても、NHK大河ドラマ『龍馬伝』、開館20周年に向けた取り組み、3.11、アメリカフォーラム、というように大きな流れがあった。それらのことが今回のシェイクハンドにつながってきた。

龍馬と関わると、手をつなぐ大切さが分かると思う。「仲間は大事ぜよ」ということ。今手をつなぐことが求められている。ならば、1歳と84歳の龍馬像も手をつなごう。どうやってつなぐ？人たちよ、みんなぁでつなぐがよ。

シェイクハンド龍馬像は、人が手をつなぐ大切さを教えてくれる。20万人以上の人と手をつないだ像の持つ力というのはすごいぜよ。

――開始前、大勢の人が手をつなぎ“握手の鎖”ができたとき、ビビッと電気が走るんじゃないかと言っていましたが、どうでしたか？

900人が手をつないだ瞬間、それまでざわざわしていた空気がシーンとなった。まさに“2分間の緊張”やったね。そして『心の八策』の唱和。代議士も園児も手をつないだまま、声をそろえて大声で言いよったねぇ。まるで自分に言い聞かせるようにね。

『心の八策』は龍馬に誓う言葉ぜよ。助け合うこと、一緒に進むことが大事。人と人が心をつなぐことが大事。奇しくも、私が子どもの頃、教会で学んだことに通じている。

今回参加できなかった人、ツィッターやフェイスブックからも多くの声が届いた。「来年はきっと参加する」「日本国中で時間を決めて外に出て、通りすがりの人皆と手をつなごう」「続けてほしい」。そんな声だった。

今、手をつなぐことを皆が求めている。手をつなぐことが社会の原点ではないか。そんなことがはっきり分かったぜよ。

森　健志郎（もり・けんしろう）
プロフィール

高知県立坂本龍馬記念館館長。1941年11月、中国・張家口生まれ。
高知新聞社会部記者を振り出しに、社会部長など勤め、定年退職。その後、中国新疆ウイグル地区にある新疆大学に留学し、帰国後現職に就く。
当日は「1941」番の札をつけて参加。

インタビュアー
前田 由紀枝【まえだ ゆきえ】
現代龍馬学会理事
坂本龍馬記念館学芸主任

当初、新年号のインタビュー候補は別にいた。森館長に伝えると、「わしをインタビューしいや」。

はぁ？

ご本人、900人のシェイクハンドの興奮冷めやらない様子。そのことを伝えたいのであろう。まぁ、それも面白いか。と思った。

森館長は忙しい。インタビュー中も5分おきに携帯電話が鳴る。森館長が就任して7年。その間、この記念館はざわざわし続けている。そのざわめきは館の中からだけでなく、館の外からもやって来た。そのたび、館長は言う。

「龍馬を発信するぜよ！」

「ひたすら前へ！」■

こぼれ話 ― 犬歩棒当記（十二）―

写真の威力

京都国立博物館　宮川　禎一

坂本龍馬の写真好きは有名だ。その風貌が数点の写真に残されているために「茫洋とした雰囲気の人物だ」などと認識されているのだ。

現在筆者が注目している写真好きは福沢諭吉先生（天保五年―明治三十四年）だ。筆者が卒業した高校のある大分県中津市が福沢先生の故郷（中津藩の下級武士だった）だからというのが先生と呼ぶ理由のひとつである。

最近、中津市にある福沢諭吉記念館を見学した。そこには数多くの写真が展示されていた。福沢先生も写真を撮られるのが好きだったようだ。

いくつもある福沢先生の写真で日本の近代化にまで影響を与えたものがある。それは万延元年（一八六〇）の幕府による遣米使節団に同行していた福沢先生がサンフランシスコの写真館で撮った一枚である。皆さんもよくご存知であろうが、その写真館の娘さん（アメリカ人の美少女）と並んでツーショットで撮影された写真のことである。福沢先生は『福翁自伝』のなかで、同行者に真似されないようにと日本への帰路にある寄港地のハワイを出航した後になってこの写真を皆に見せびらかしたのだと記している（『福翁自伝』とは自慢話の書。そこが面白い）。

この写真は「攘夷」が昂揚していた文久年間に郷里の中津の実家へと送られた。そして見にきた若者（青木周蔵、のちの外務大臣）がこの写真に衝撃を受けて漢学をやめて洋学を志すようになったとされているのだ。『学問のすすめ』や『文明論之概略』などの著作物ではなく、たった一枚の写真が近代化の人材を生むきっかけとなったのである。

たしかに今見ても羨ましい写真だ。百万言をついやすよりもたやすく西洋的近代化による明るい未来図を若者に見せたのである。福沢先生のお茶目な性格がもたらした一枚であり、写真のもつ力を示す一枚なのである。

福沢諭吉と米国少女写真
（慶応義塾福澤研究センター提供）

コラム・龍馬のこと

坂本龍馬の魅力　会員　北野正幸

龍馬は子供のころあまり勉強ができませんでした。しかし母親代わりだった3歳上の乙女姉さんからスパルタ教育を受けて芽が出てきました。この芽がやがて大輪の花を咲かせました。

私が龍馬の名前を知ったのは50年以上前の小学生の頃です。当時親戚のいとこが実家に下宿して、昼間働きながら夜間都内の大学に通学していました。ある日龍馬のことを熱く語ってくれました。龍馬が英雄であることを知りそれ以来龍馬ファンになりました。

平成20年5月15日、坂本龍馬の妻おりょうの若いころの写真が夕刊に掲載されていました。新聞記事によると研究者間では、おりょうは写真撮影を嫌っていたと記されていました。若いころの写真が発見されたことはうれしく思います。そしておりょうの写真が龍馬記念館を知るきっかけになりました。

平成22年4月下旬から龍馬伝（特別企画展）が江戸東京博物館で開催されました。平日なのに展示室入口前は数メートルの列ができていました。

龍馬は生前様々な人物と出会いました。土佐勤王党首・武市半平太は龍馬の親友でした。近藤長次郎・岩崎弥太郎は異色の人物として紹介されていました。龍馬の目から見ると将棋の飛車&角の存在だったと思います。勝海舟と出会ったことが龍馬の運命を変えました。龍馬の妻おりょうは愛の力で夫を支えました。後藤象二郎は龍馬の策（船中八策）をとり大政奉還実現に向けて背中を押しました。土佐藩の傘下に入った土佐海援隊に財政支援をしました。西郷隆盛・木戸孝允・高杉晋作・中岡慎太郎・陸奥宗光・松平春獄…時代の変革期に出会い未来に向けて汗をかいたことが大きな成果（明治維新）をあげたのです。

パソコン入門講座受講期間中に坂本龍馬記念館を知りました。ホームページを開きページを見て回りました。龍馬の功績&人柄がなんとなくですが映画の寅さんのような親しみを感じました。

“話してみるかよ”

“Hand-in-Hand”　永国淳哉

竜頭岬の丘から浦戸城跡に建つ龍馬記念館。それぞれの場所に立つ龍馬像を結んで、日本中の老若男女が“Hand-in-Hand”。本年、龍馬生誕日の後の日曜の早朝、新しい“絆”ができあがった。

「いまも龍馬は生きている～～～」オンチャンコーラスが全山に響いた。

心地良い司会のリズムが、時の過ぎているのを忘れさせ、イベントは“アッ”という間にフィナーレ。「現代こころ八策」を皆で宣言した。

「1.家族を大切にしよう。」「2.お年寄り…」…。

龍馬姿の子どもの間に手を躍らせながら、「6.志は高く持とう」「7.勇気を持って行動しよう」と声を合わせた。

そして、龍馬の「船中八策」を想った。

今から百五十年前、同じように“絆”を求めて、全国の「志」ある人々――あらゆる階層の武士、浪人、村役人、農人、商人たち…老いも若きも、男も女も参加して“桜咲く日本”の為に論じ合い、手を組んだ。

そもそも黒船来航で開国した後、着任したハリス米総領事と井伊直弼大老が、修好通商条約に調印したあたりから騒ぎが大きくなった。勅許なしで内容は、「不平等極まりない」。“志士”といわれていた若者の先頭に立って、龍馬も故郷を捨て、奔った。奔りながら、“平和”の重要さを考え、「船中八策」をまとめあげた。

その「志」高き精神は、龍馬亡き後も生き続き、今日の“絆”が築かれてきたのだ。

予想二倍の千人が、笑顔で手をつなぎ「8.レッツゴウ“Hand-in-Hand”」と叫んだ朝だった。

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会　TEL(088)841-0001　FAX(088)841-0015
〒781-0262 高知市浦戸城山830　http://ryoma-kinenkan.jp